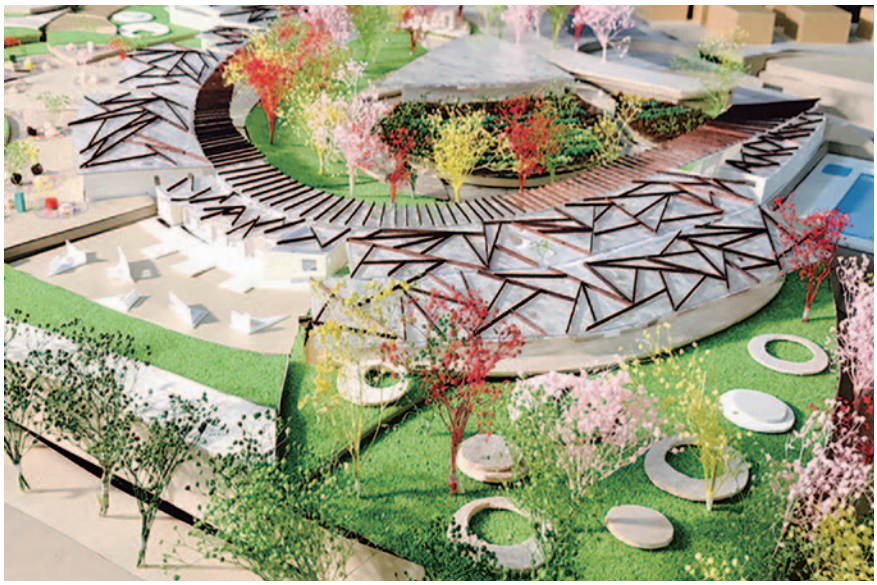
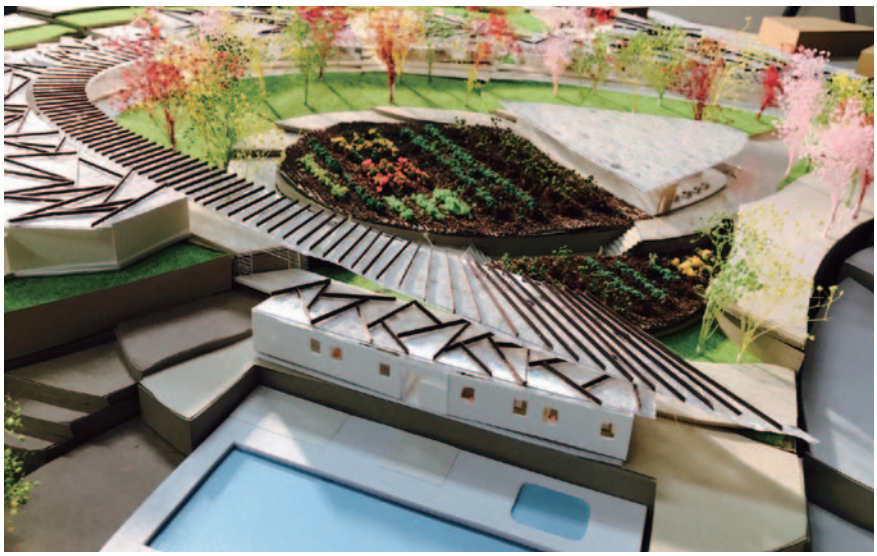
魅る空間・魅せる空間

ろう学校計画

東奈津
共立女子大学　家政学部建築デザイン学科





ろう学校は、『聴覚障害を持つ子ども』を対象にした学校のこと。私は聴覚障害をもつ子どもたちとボランティア活動をしたことがきっかけでこのテーマを選択した。障害に合わせた設計を心がけるとともに、障害を個性として捉え感性豊かに過ごせる環境を提案する。

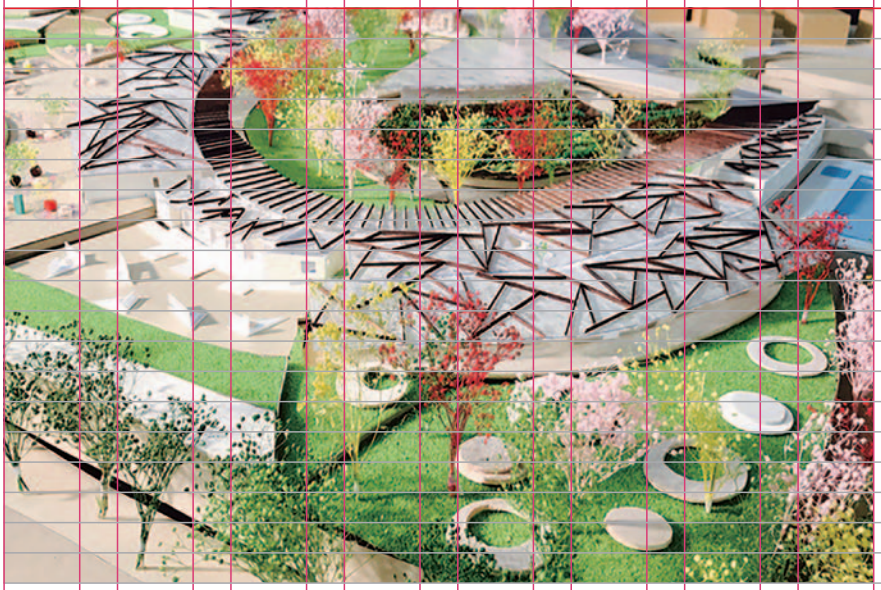
彼らは感性が非常に豊かで、身振り手振りで精一杯私に接してくれた。しかし聴覚障害をもつ子どもが通常の学校に通っていながら、ろう学校に編入し直す場合があると知った。相手の話す内容がわからなくとも聞き返すことをためらい、わかったと頷いてしまうそうだ。私は障害を持っていない。だが彼らの感性の豊かさに惹かれ、より活かされる環境を考えるべきだと感じた。経験や資料をもとに空間を通じてろう学校の在り方を考える。

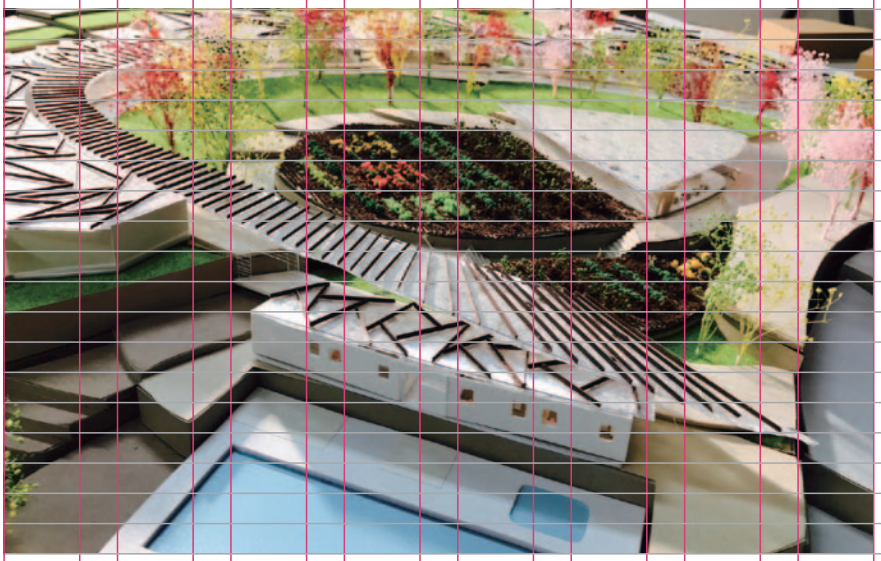
今日、学校教育法改正によりろう学校は盲・養護学校と統合し特別支援学校と名を変えた。ろう学校が減少する中、同じ障害をもつ子ども同士のコミュニティを大事にしたい。

魅る空間・魅せる空間

ろう学校計画

東奈津
共立女子大学　家政学部建築デザイン学科





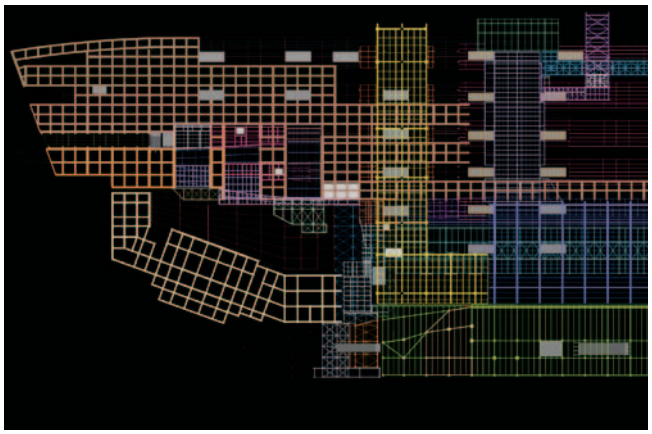
ろう学校は、『聴覚障害を持つ子ども』を対象にした学校のこと。私は聴覚障害をもつ子どもたちとボランティア活動をしたことがきっかけでこのテーマを選択した。障害に合わせた設計を心がけるとともに、障害を個性として捉え感性豊かに過ごせる環境を提案する。

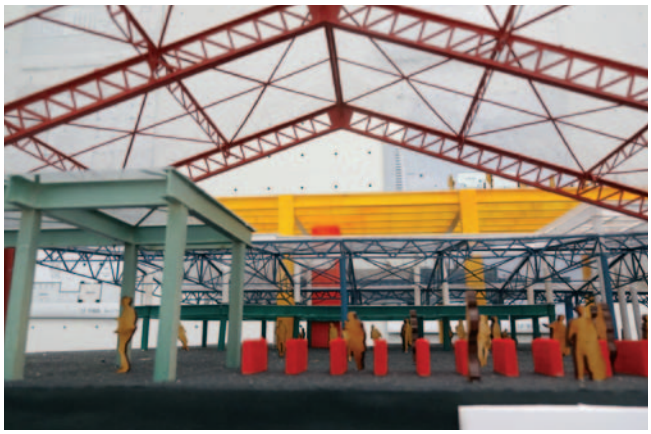
彼らは感性が非常に豊かで、身振り手振りで精一杯私に接してくれた。しかし聴覚障害をもつ子どもが通常の学校に通っていながら、ろう学校に編入し直す場合があると知った。相手の話す内容がわからなくとも聞き返すことをためらい、わかったと頷いてしまうそうだ。私は障害を持っていない。だが彼らの感性の豊かさに惹かれ、より活かされる環境を考えるべきだと感じた。経験や資料をもとに空間を通じてろう学校の在り方を考える。

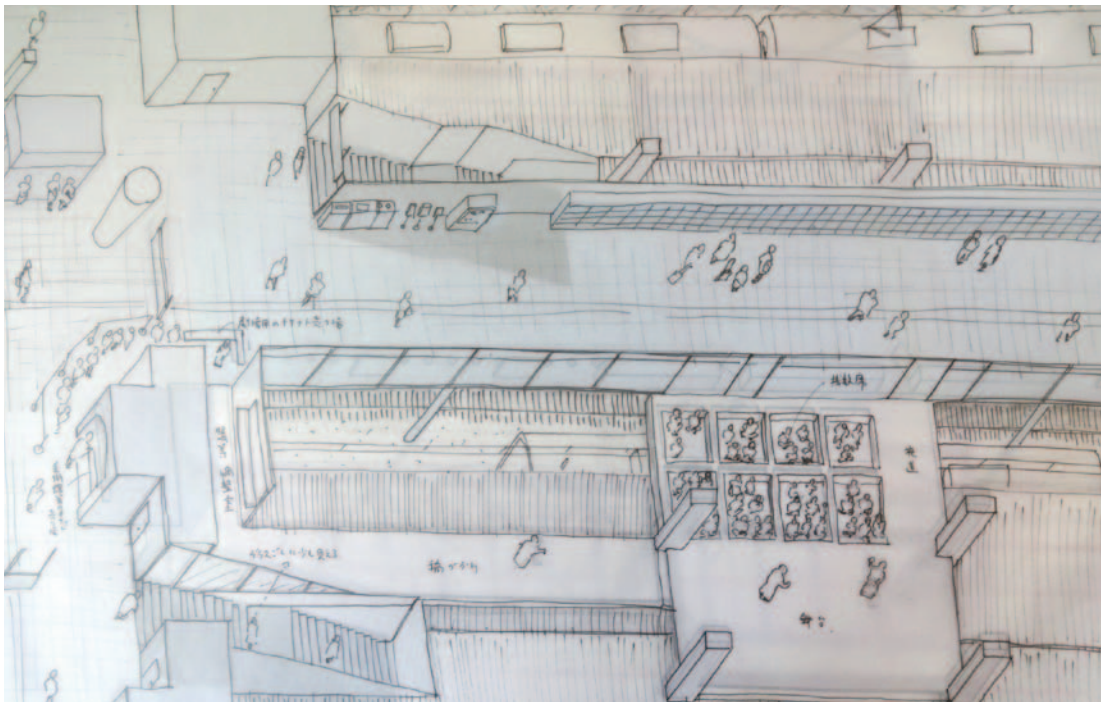
今日、学校教育法改正によりろう学校は盲・養護学校と統合し特別支援学校と名を変えた。ろう学校が減少する中、同じ障害をもつ子ども同士のコミュニティを大事にしたい。

上野・ステーションコレオグラフ

荒木遼
東京芸術大学　美術学部建築科







上野駅の中に4つの小さな劇場を作る計画。

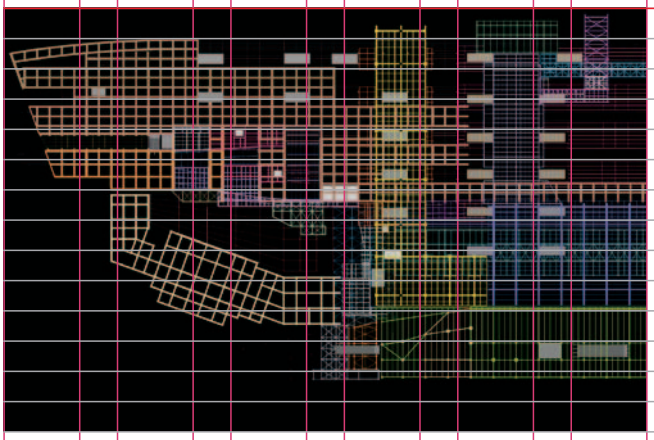
上野駅は、駅としての機能を止めることなく更新されつづけてきた。その結果様々な時代の構造体が複雑なパッチワークを構成している。時間軸上で複数の計画が重なったため生じる、駅としての機能から外れた「隙間」を利用して劇場を設計した。

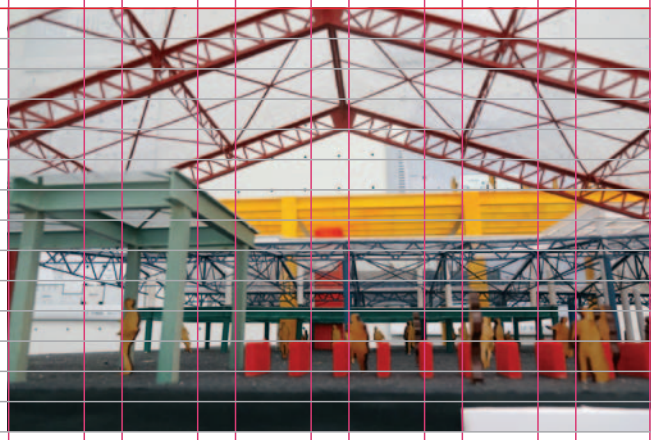
相次ぐ改築のため現況の駅の図面は存在せず、上野駅の実測調査を行い構造体のモデリングを行った。

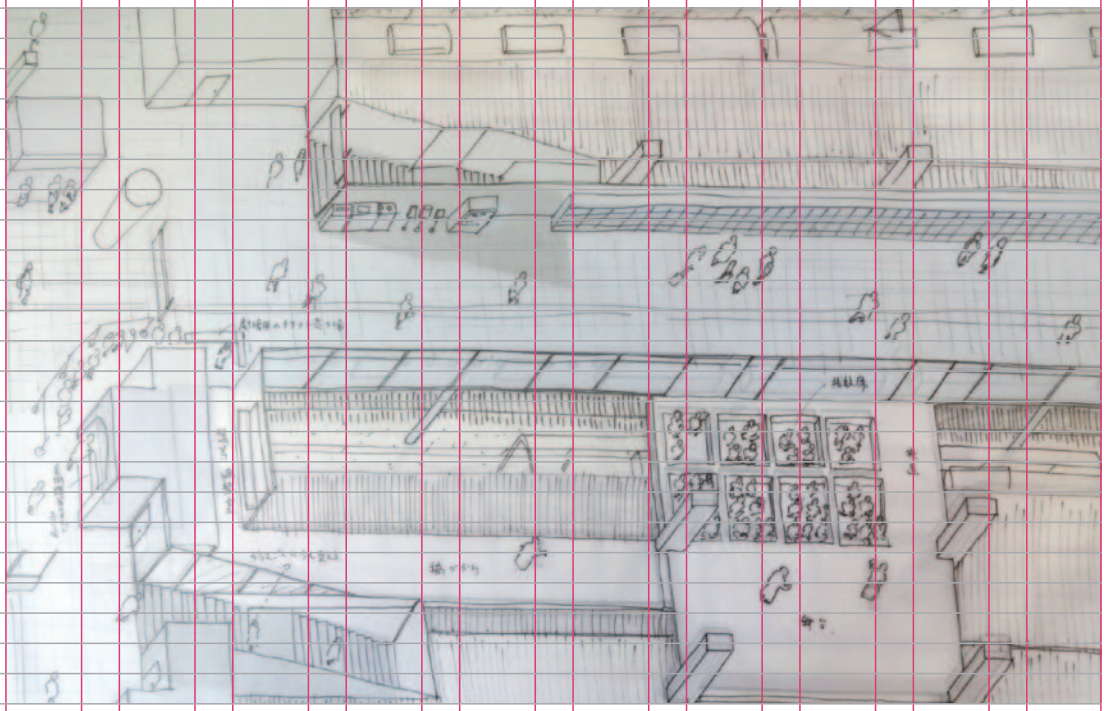
複雑な空間を駅として機能させているのは、改札機や天井に吊られた案内表示といった、人々の行動に密接に関わる小さな要素「コンポーネント」たちであると考えた。私は既存の「コンポーネント」に混じって新たに劇場の機能を持たせる「Xコンポーネント」を忍び込ませることによって、例えば駅の改札の横に劇場に入るための改札が並んでいたり、発着番線の案内表示に混じって劇場に向かう案内が吊るされていたりというように、日常的な駅の延長上に劇場を生み出す。

上野・ステーションコレオグラフ

荒木遼
東京芸術大学　美術学部建築科







上野駅の中に4つの小さな劇場を作る計画。

上野駅は、駅としての機能を止めることなく更新されつづけてきた。その結果様々な時代の構造体が複雑なパッチワークを構成している。時間軸上で複数の計画が重なったため生じる、駅としての機能から外れた「隙間」を利用して劇場を設計した。

相次ぐ改築のため現況の駅の図面は存在せず、上野駅の実測調査を行い構造体のモデリングを行った。

複雑な空間を駅として機能させているのは、改札機や天井に吊られた案内表示といった、人々の行動に密接に関わる小さな要素「コンポーネント」たちであると考えた。私は既存の「コンポーネント」に混じって新たに劇場の機能を持たせる「Xコンポーネント」を忍び込ませることによって、例えば駅の改札の横に劇場に入るための改札が並んでいたり、発着番線の案内表示に混じって劇場に向かう案内が吊るされていたりというように、日常的な駅の延長上に劇場を生み出す。

17.5 90 25 5 55 17.5

10

28

20

4

モノクロ顔写真
W25mm X H30mm
RGB
jpg か tif形式
300-350 dpi

タイトル [小塚ゴシック Pro B 14Q, 行間 4mm]
サブタイトル [小塚ゴシック Pro R 10Q, 行間4mm]
タイトルと姓間は 1 行間
姓名 [小塚ゴシック Pro R 10Q, 行間 4mm]
大学名□学部学科

欧文は全て半角

図版
グリッドに合わせた大きさ
RGB
jpg か tif形式
300-350 dpi

テキスト
[小塚ゴシック Pro R 10Q, 行間 4mm]
欧文は全て半角

かつての地域コミュニティは防衛意識、敵対心などの共通意識により形成されてきた。現代においては多様な人物が共有可能な空間を設けることでコミュニケーションを誘発するという考え方が一般的である。しかし、そこにリアリティはあるか。空間における他者との境界の曖昧さは場の共有を強制し、他者の介入を余儀なくする。様々なものが多元化している中で、現代人は共有することに逆に心理的な境界を覚えてしまうのではないかと考える。そこには共通意識が存在しないからである。
かつて政治や情報の拠点であった城を媒介として、その共通意識を生み出すための建築をつくる。その城は個人、家族、他の集団の部屋が密集することで構成され、通路も部屋も介さないことで自己の居場所が担保される。そうして、意識的ではない（強制的ではない）無意識的な共有の意識が生む。

段落は 1 行空き、文頭アキ無し

ここに集まる子供たちは西新宿、歌舞伎町、オフィス街で働く人の子供たちです。女性が社会進出を果たしている今こそ都心部に子供の場が必要といえます。

17.5 mm 10 5 17.5

15 mm

タイトル

サブタイトル

姓名
大学名　学部学科

本計画地は広島市中心部の本通商店街に隣接した地区である。本通商店街は江戸時代からの歴史を持つ商店街であり、中四国地域を代表する超広域型商店街である。周辺には都市の主要施設があり、広島のビジネス・商業・観光の中心として日々多くの人が訪れている。しかし、近年郊外に大型ショッピングセンターが多数出店し、強い商品力によって集客を奪われている。

これからの地方都市の商店街には、地元商店の個性をＰＲする場や、商品力だけではない付加価値が必要である。

そこで、商店街の付加価値を生み出す空間として、地元商店の人々と訪れた人の交流の場となる施設を計画する。施設内で行われる本通地元商店のPR活動に、訪れた人が参加することによって交流を行う。様々な人々が訪れる地区に交流施設を設けることで、幅広い交流が行われる。商店街での過ごし方が、消費だけでなく多様化することでより多くの人が訪れ、活性化していく。